Ⅶ　前橋市上細井地区の古墳について

前橋市文化財整備指導員　右島和夫

1　調査成果から類推される古墳の概要

今回調査された上細井遺跡群№2においては、南北に近接する2基の円墳と推定される古墳が確認された。調査範囲が狭かったために全体形状を明らかにできなかったこと、古墳の端部についての調査のため、主体部が確認できなかったこと、直接伴う遺物がまったく認められなかったことから、古墳そのものについての具体的内容は確定できない。それでも古墳として断定できたのは、周堀の形状と覆土の特徴が直接的手掛かりである。

数少ない情報ではあるが、古墳の内容を類推することは可能であるので、いくつかの特徴について述べることにしたい。まず、2基とも円墳と思われる。円墳は、古墳時代の全期間を通じて行われた墳丘形式である。本墳のような小規模円墳の場合は、上限としては、竪穴式小石槨を主体部とする5世紀後半ないし6世紀前半の群集墳を構成するものがある。その場合は、基本的に周堀が全周することと、堀の幅が狭く、両側の立ち上がりとも垂直に近い、断面U字形を呈するものが一般的であるので、本例は、この種の円墳には該当しないと考えていいだろう。幅広で内側に向けて緩やかに立ち上がる形状は、横穴式円墳と考えていいだろう。2基のうちM―2号古墳は、西側の周堀についてある程度検出することができたが、南西側で堀が収束することがわかる。このような周堀の形状は、石室入口前に当たる南側部分の周堀を穿たず、掘り残すことによって、周堀の外側から石室にいたる土橋（渡り状施設）を造作しているものと考えられる。土橋と石室入口の間には前庭構造が付設されるのが一般的である。

このような周堀は、終末期の円墳の特徴をよく伝えるものである。埴輪を伴っていないことも、終末期に属する推定と矛盾しない。

2　丑子塚古墳について

調査区の南方60mの近接地に墳丘長40mほどの比較的大型の前方後円墳がある。「丑子塚古墳」と呼称されており、以前からよく知られている前方後円墳である。昭和10年の県下一斉古墳分布調査では、南橘村第6号墳とされており、墳丘全長44.4mという数値が記されている。今回、関連調査として本墳の墳丘測量調査を行ったところ、墳丘は比較的よく遺存していることがわかった。裾部は周囲からの削平により、詰まっているが、墳丘上部は前方後円墳の形状を比較的よく残していることがわかる。測量調査の結果によると、墳丘主軸を南北とし、南に前方部、北に後円部を配している。かろうじて残っている可能性のある、前方部前端や後円部西側を基準として、墳丘の当初の墳形を復元すると右図のようになり、墳丘長約45m、後円部径約22m、前方部前幅約27mの数値が得られる。

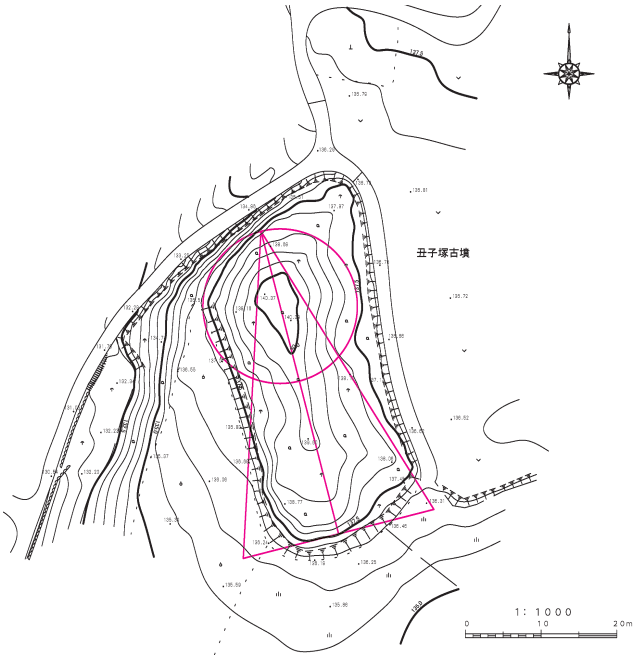

Fig. 7　丑子塚古墳墳丘復元図

これらの諸特徴の中で注意されるのは、主軸を南北に取る点である。横穴式石室を主体部とする6世紀の前方後円墳の場合、上野地域の事例では、

表8　『上毛古墳綜覧』に掲載されている上細井地区の古墳

古墳番号	古墳名称	形状	現状	発掘有無	所在地			面積		大きさ	高さ	所有者	備考
一		円形	桑畑	有	上細井	西堀	二一〇ノ一	畑	二三	二〇	径　五〇尺	一三尺	長谷川長七	金環、刀剣十五振、人骨、歯	明治三十六、七年頃発掘
二		同	同	同	同	同	二一〇ノ一	同	二三	二〇	径　六六尺	一三尺	同	金環、刀剣、人骨、歯	明治三十六、七年頃発掘
三		同	畑	同	下細井	鎌倉	八五六ノ一	同	一一	二七	径　六六尺	一〇尺	芳賀村 長岡圭平	金環、刀剣、人骨	明治三十年頃発掘
四		同	山林	同	上細井	西堀	二四五	山林	三	〇〇	径　六六尺		金井乙丸		
五		同	畑	同	同	東丑子		畑	三	〇〇	径　六六尺		内田傳重	埴輪	
六	丑子塚	前方後円	山林	同	同	同	三七五	山林	三	〇〇	径一四八尺	前一三尺 後一〇尺	長谷川與平治 外二名	金環、刀剣、埴輪	明治二〇年頃発掘。石槨ヲ存ス、入口破損セルヲ以テ入ルヲ得ズ
七		円形	畑	同	同	同	乙三七九	畑	六	〇四	径　五〇尺	開墾セラレシヲ以テ不明	内田七三作	埴輪破片	
八		同	桑畑	同	同	同	四〇一ノ一	同	一六	二二	径　六六尺	一〇尺	長谷川長七	埴輪破片	
九		同	宅地	同	同	南灰俵	三二三ノ一	宅地	九	二九	径　六六尺	一〇尺	長谷川與平治		
一〇		同	畑 小祠有	同	同	同	三一六	畑	三	一六	径　六〇尺	一三尺	長谷川長七	刀剣、人骨	
一一		同	宅地	同	同	端気	六〇八	宅地	二四	〇六	径　六六尺	一三尺	同	曲玉	出土品一部ハ宮内省ニ献上
一二		同	畑	同	同	東丑子	四〇一ノ二	畑	二二	一一	径　六六尺	一〇尺	同	埴輪	
一三		同	同	同	同	同	三九九	同	二〇	〇五	径　五〇尺	一〇尺	金子安司	埴輪	
一四	狐塚	同	山林	同	同	薬師	一、一一〇	山林	三	〇〇	径　六六尺	一三尺	岡庭浪平		
一五		同	畑	同	同	南新田	一、一四六ノ一	畑	一八	一二	径　八二尺	一三尺	信澤米吉	刀剣、曲玉、埴輪	宮内省ニ献上

主軸を東西とし、後円部を東、前方部を西に配し、墳丘主軸と直交して後円部に南に開口する横穴式石室を設けるのが通例である。例外としては、横穴式石室導入期である6世紀初頭の前橋市王山古墳がある。墳丘主軸を南北とし、南に後円部、北に前方部を配し、墳丘主軸と直交して後円部に東に開口する横穴式石室を設けている。ただし、これは例外中の例外で、他に類例をみていない。以上から丑子塚古墳については、横穴式石室を主体部とする6世紀の前方後円墳である可能性は極めて弱いと考えている。横穴式石室導入以前に当たる5世紀の所産と考えたい。ただし、これとて、断定するまでにはいかないところであり、今後の資料増加を待ちたい。

3　上細井丑子塚古墳群の提起

今回調査したM―2号古墳は、地番との照合から、昭和10年の古墳分布調査成果をまとめた『上毛古墳綜覧』によれば、勢多郡南橘村13号墳が該当する可能性が強い。当時の現況で、径約15m、高さ3mを有していた。この規模は、高さも含めて横穴式円墳の規模にふさわしいところである。ところで、M―2号古墳や丑子塚古墳（南橘村6号墳）のある丘陵は、西側を鎌倉川が北から南へと流れ、東側はここから程なくして鎌倉川に合流する小河川がやはり北から南へ流れている。この両河川に挟まれた東西幅100mほどの帯状の丘陵には、今回の2古墳と丑子塚古墳に加えて、円墳4基（南橘村5・7・8・12号墳）が所在していたことが『上毛古墳綜覧』に記されている。その所在地番に即して地図上に位置を落としてみると、丑子塚古墳のごく周辺に前方後円墳1基、円墳6基が集中していたことがわかる。この集中域の北側に近接する平成20年度に調査されたM―1号古墳も同じグループの中で理解できる可能性がある。丑子塚古墳を中心にして周辺一帯を共通の墓域として形成された古墳群と理解することが可能であり、「丑子塚古墳群」と仮称するまとまりが想定されるところである。

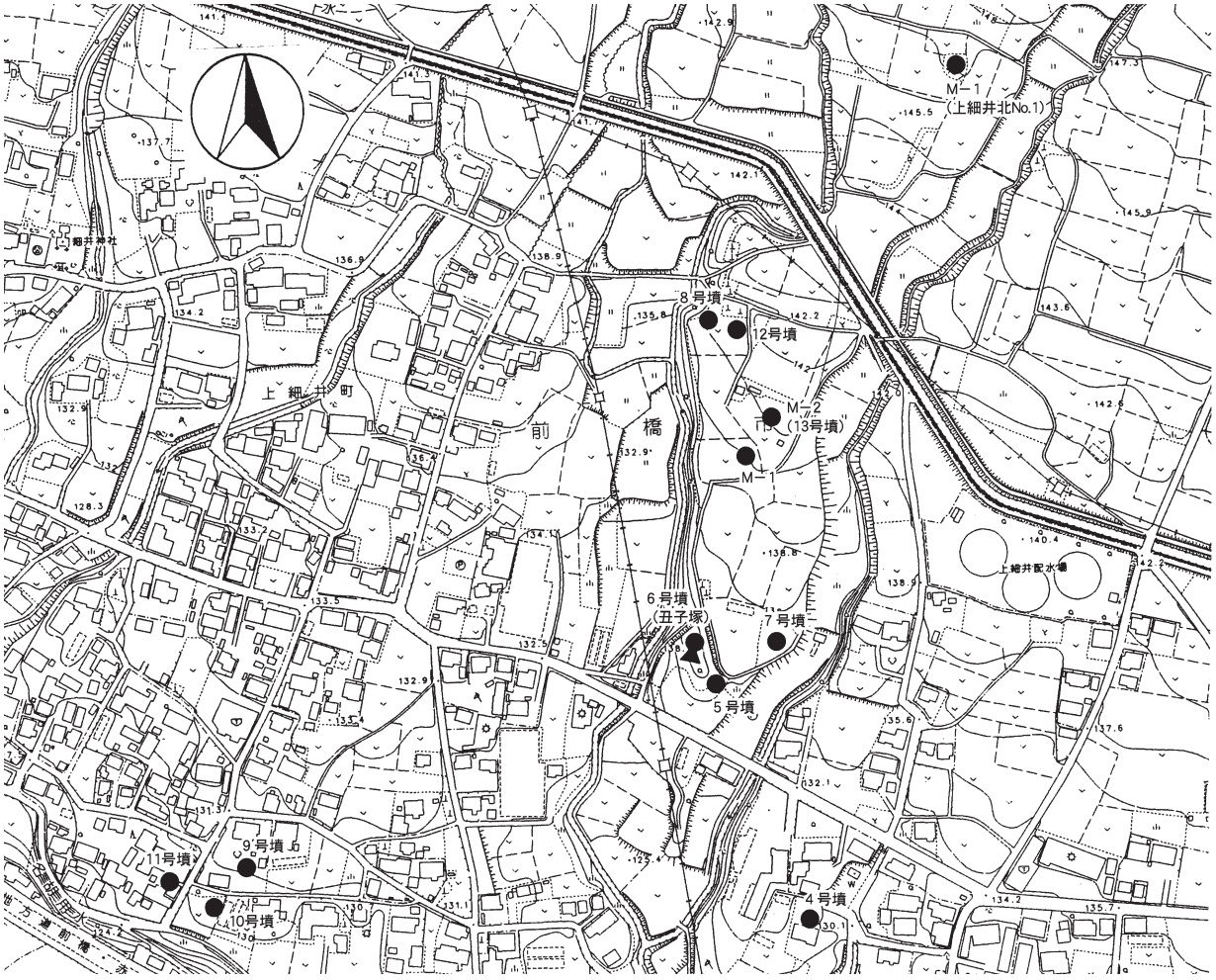

Fig. 8　上細井丑子塚古墳群分布図

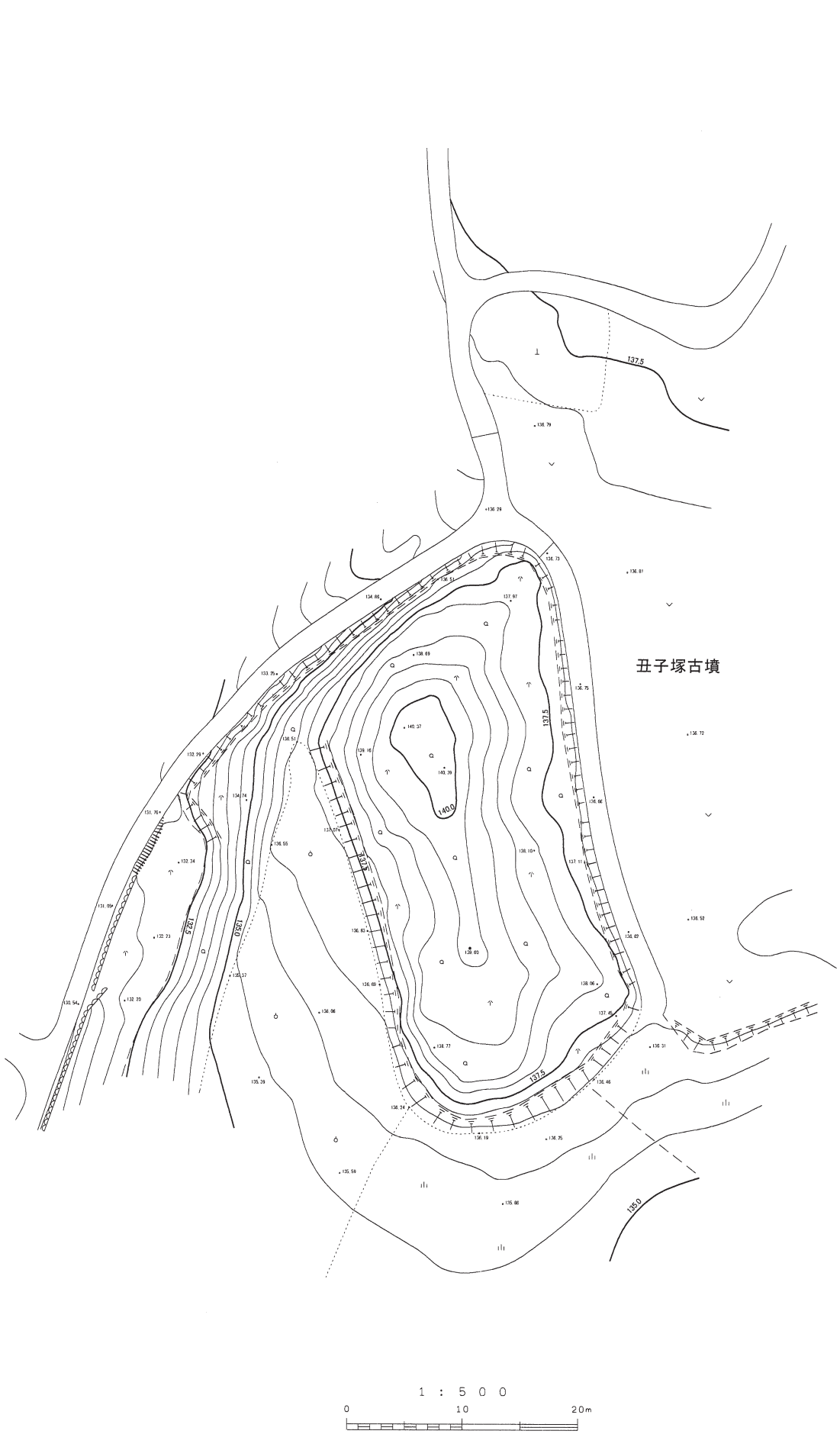

Fig. 9　丑子塚古墳全体図

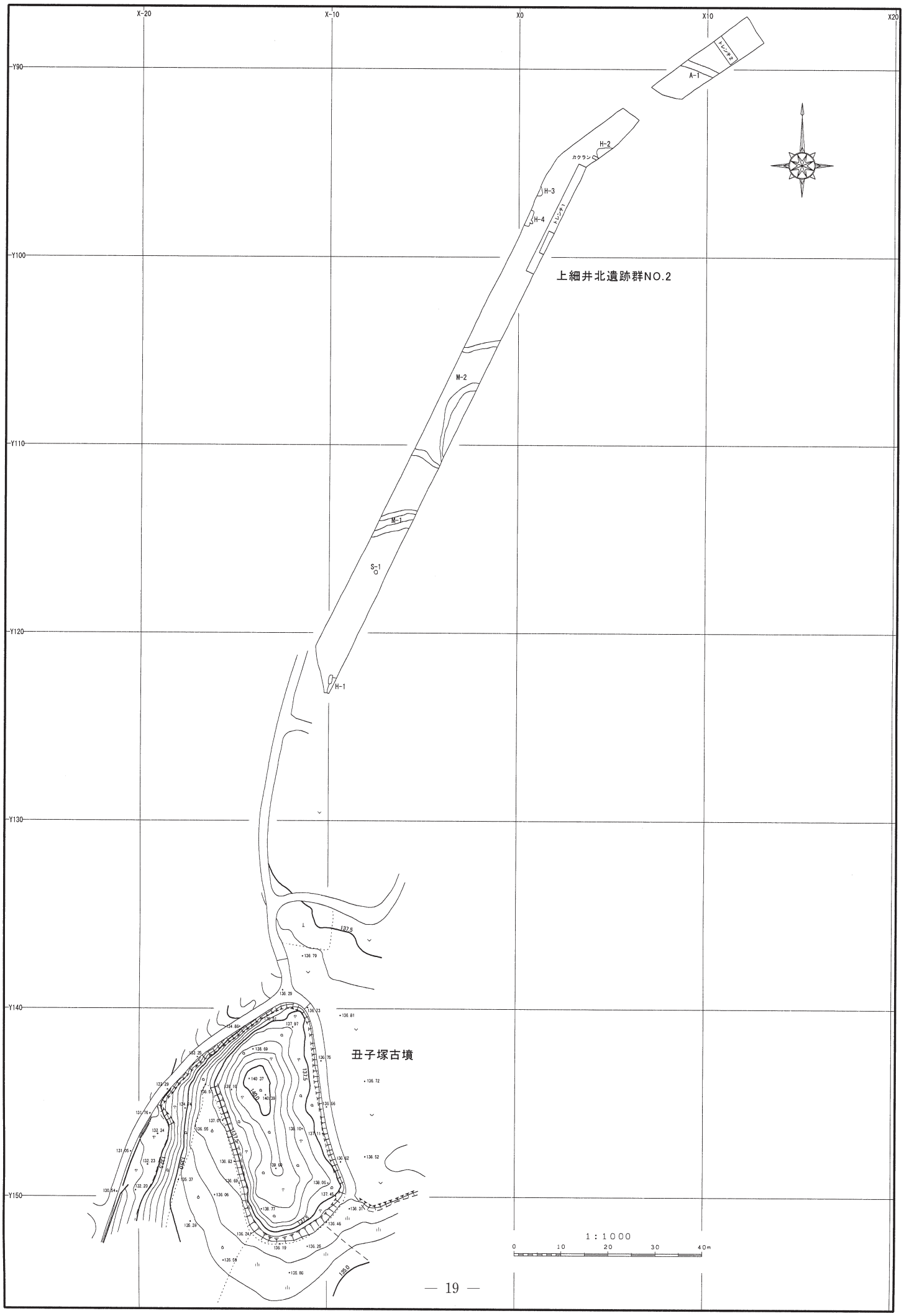

Fig.10　丑子塚古墳と上細井北遺跡群№２位置図